

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第20回 もろ おか ちょう ぞう 諸岡長蔵

商売に活路を開く

諸岡長蔵は、明治12(1879)年1月6日、下埴生郡成田村(現在の上町)に父萬蔵、母なつの長男として生まれた。生家は米屋を営んでいた。

長蔵は子どものころから病弱であったが、16歳の時に天理教と出会い「身体は天からの借り物である」との教えを知り、心の持ち方や考え方を変えることができた。しかし数カ月後、特効薬がなく当時では死を覚悟するしかない病気であった肺結核と診断された。絶望的な状況に置かれていたが、教えを支にしたこともあり、奇跡的に病状は持ち直していった。

明治32年、長蔵が20歳の時、入隊後の兵隊検査で体力不十分により除隊となり、帰郷した後家業を継いだ。家長として手始めに家屋・店舗を改造し、店には菓子類や他店のようなかん、玩具、雑貨類を置いた。祖父の見舞客からもらった大量の砂糖を活用し、母なつがようかんを作り店に置くと、好評であったという間に売れてしまった。次に栗を入れて作ってみると、こちらもすぐに売り切れ、評判を聞いた多くの人が店を訪れた。米屋ようかんは、このように思いがけないいきさつで出発した。

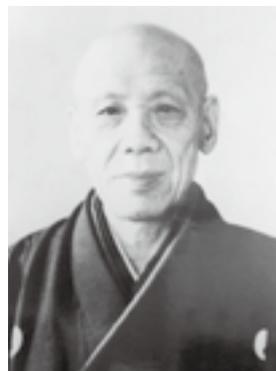
長蔵は、売値をぎりぎりに抑え「呼び売りしない」「値段のかけ引きをしない」を店是として店頭に掲げ「諸岡商法」の信条を実践した。このことは、土産物店がひしめく門前町では命取りともなわかねない決断であり、参拝客の足を遠ざけることとなった。



左／創業当時の米屋本店(『図説 成田の歴史』より)
右／成田羊羹資料館(場所：上町)

明治12年～昭和44年(1879～1969)

下埴生郡成田村(現在の上町)に生まれる。20歳の時、祖父の見舞いにももらった砂糖から作ったようかんを売り評判となる。品質本位・定価主義を貫き、量産体制を確立し、昭和20年に株式会社米屋本店を設立。道路改修事業などに多額の援助を行い、本市の発展に大きく貢献したとして、85歳で名誉市民となった。



しかし、8年以上品質本位・定価主義の経営方針を貫いた結果「成田で安いのは米屋のようかんだ」と理解され、景気に左右されることなく、日露戦争後の大恐慌でも順調に売り上げを伸ばした。大正4(1915)年に成田羊羹同業組合長に就任し、組合員には「良品廉価」「品質本位」「定価主義」の啓発を行った。

成田市名誉市民に

子どものころから病弱であった長蔵は、信仰を通して「人を助けて我が身助かる」という強い思いを持ち、道路工事・育英事業・社会福祉事業など広く公益に尽くし、また困窮する商家や家庭への援助を行い、私財を投じて社会奉仕活動を続けた。

昭和20(1945)年、長蔵が66歳の時、米屋を株式会社とし、社長に長蔵、専務に長男の謙一が就任し、経営は謙一に委ねられた。同25年に社長を謙一に譲り、社名を「こめや」から「よねや」に変更した。長蔵の「己れに薄く、他に厚く」をモットーに経営を続け、今日に至っている。

長蔵は、昭和33年市制5周年の際に「世界連邦平和都市宣言」を記念して「平和女神像」を市へ寄贈した。同39年、85歳の時に、市の発展と社会福祉に貢献した実績から成田市名誉市民となった。

昭和44年10月8日、90歳の長寿でその生涯を閉じた。なごみの米屋總本店敷地内にある成田羊羹資料館には、長蔵の愛用品が展示されている。

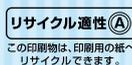
編集後記

先日行われた全国広報コンクール千葉県選出作品審査の組み写真の部で、「広報なりた」が最優秀作品に選ばれ、全国広報コンクールへ推薦されることになりました。対象となったのは、平成30年9月1日号に掲載した世界女子ソフトボール選手権大会。大会で撮影した約6,000枚の写真の中から14枚を厳選し、ストーリーを考慮しながら配置しました。これからも市民の皆さんに親しまれる広報紙づくりに取り組んでいきますので、よろしくお願ひします。

平成31年2月15日号 No.1381

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。